

〔研究報告〕

母性看護学演習において家族を含めた支援を考える演習方法の検討

金子 洋美¹⁾ 服部 律子²⁾

Investigation of Maternity Nursing Seminars that Take Family Member Support into Consideration

Hiromi Kaneko¹⁾ and Ritsuko Hattori²⁾

要旨

母性看護学教育において、家族に視野を拡大した演習方法を取り入れ、家族を含めた支援方法が考えられる事を目的に、A看護短期大学2年生を対象に演習方法を検討した。演習は、なじみのあるキャラクターにストーリー性を持たせて、家族のイメージ化を図る方法にした。妊娠期演習では、妊婦ジャケットを着用し、提示したキャラクターをイメージしながら妊婦役・夫役になり、日常生活動作を行った。分娩期演習では、家族の期待や不安をイメージしながら呼吸法・補助動作を行った。産褥期演習では、核家族であり夫の仕事は変則的である家族をイメージしながら、沐浴演習を行った。これら演習後のレポートを質的帰納的に分析した。その結果、妊娠期演習では、妊娠期の家族をイメージしながら夫・祖父母の視点から家族の役割について具体的な内容を考えることができた。分娩期演習では、分娩期の家族の期待や不安をイメージしながら演習を行う事で、家族の意見を汲み取りながら、家族の発達を促していく看護について考えることができた。産褥期演習では、核家族であり夫の変則的な仕事体制を取り入れた家族をイメージする事で、より現実に即した家族関係再構築への看護について考えることができた。この演習方法により、家族役割や、家族を含めた支援を考えるために、なじみのあるキャラクターにストーリー性を持たせた家族のイメージ化を図った演習は効果があると考えられた。

キーワード：家族、母性看護学、教育

I. 緒言

看護基礎教育における家族への看護は、看護領域ごとに、その領域の対象に合わせた家族の支援について学習されていることが多い。母性看護学では、新しい家族を迎える家族の形成期に焦点があてられている。この時期を家族の発達の機会として捉え、家族を中心とした看護を展開していく重要な役割がある。

近年の少子化に加え、地域における子育て機能の脆弱化、虐待など社会的問題は深刻化している。そのため、母性看護学では、男性や家族、家族が生活する地域社会をも対象に含め（森，2009）、家族も支援の対象として位置付けている。家族は、妊産婦が親としての役割を果たしていくための支えとなり、重要な役割を果たしている存在であ

り（太田ら，2006）、子どもと親との関わりだけでなく、子どもの周囲にいる人々との関係性も十分考慮することの必要性や家族の対応能力を知ることの重要性が言われている（片山ら，2011）。

しかし、母性看護学臨地実習では、分娩件数の減少に伴い受持ち対象は減少し、さらに、医療安全確保の取り組みの強化（厚生労働省，2004）に伴って、学生が実践できる看護技術の範囲や実践する機会は限定され、実習で家族支援について考えることが困難になっている。また、学生は、身近に妊産褥婦・乳幼児と接する機会も少ないため、母性看護の対象やその生活をイメージする事が困難な状況下にある。さらに、日常生活体験が乏しいために生活に密着した看護上の問題点や保健指導の内容を導きだすことが

1) 岐阜大学医学部看護学科 Department of Nursing, Gifu University School of Medicine

2) 岐阜県立看護大学 育成期看護学領域 Nursing of Children and Child Rearing Families, Gifu College of Nursing

容易ではないと言われている(松木, 2010)。先行研究では、臨地実習において、夫の戸惑いや実母の不安に対する気づきが得られたという報告(石井ら, 2001)や、産婦・家族のケアニーズを共に模索する指導のあり方についての報告がある(重西ら, 2006)。講義においては、対象を家族というシステムの中で捉え、眼前の対象者の状況だけを捉えるのではなく視野を広く持つことを重視した母性小児領域の合同授業の取り組みが報告されている(小川ら, 2005)。しかし、学内演習に関しては、家族を視野に入れた演習方法に関する取り組みは見当たらない。家族に視点を持ち、家族支援の必要性を講義で学んだ学生が、臨地実習と同じ状況設定のなかで家族支援を考える演習を行うことにより、臨地実習の場面でも家族に目を向けることになると考える。学内演習と同じような状況である臨地実習であれば、学生自ら、家族の存在を意識し、家族支援に取り組みたいという内発的動機づけを形成することに繋がると考える。筆者は、A看護短期大学の演習・実習を担当する立場にあり、技術演習に特化した従来の演習内容を工夫することで、家族に視野が拡大できると考えている。

よって、家族に視野を拡大した演習方法を取り入れ、家族を含めた支援方法を考えられるような演習方法を検討することが必要である。

II. 研究目的

本研究は、妊婦・産婦・褥婦とその家族について具体的なイメージを形成する母性看護学演習を実践し、家族役割や支援について学んだことは何か明らかにすることで、演習方法を検討する。

III. 研究方法

A看護短期大学の母性看護学は、1年次後学期の「母子看護学概論」、2年次前学期の「母性看護活動論Ⅰ」「母性看護活動論Ⅱ」、2年次後学期の「母性看護学実習」で構成されている。「母子看護学概論」では、家族関係の変化や社会の動きについて学習する。「母性看護活動論Ⅰ」では、妊産褥婦と家族への看護についてグループワーク形式で学習する。

「母性看護活動論Ⅱ」では、母性看護の対象とその家族の持つ健康問題について看護過程の技法を用いて学習する。また、看護計画を実践するために必要な看護技術を学

習する。これらの知識・技術を基に、看護の基礎的能力を養うことを目標として「母性看護学実習」を行っている。本取り組みは、母子とその家族について概論的知識を習得後に、実践に必要な看護技術を学習する「母性看護活動論Ⅱ」の演習で取り組む。

1. 演習方法

技術演習に特化しており、家族に意識が向けられていない従来の母性看護学演習プログラムの見直しを行った。ウェルネス看護診断を導入した授業を展開しており、人間の本来持っている力に気づき、対象のありのままの状態や強みの部分をポジティブな思考で判断する学習をしている。この学習効果を看護の方向性に連動できることを意図した。対象の状況を解決するための直接的なケアだけではなく、情報提供やケアリングを中心とした見守るケア、支持するケアなど多様なケアの方法(太田ら, 2006)に気づくことができるプログラムとした。本プログラムの内容の妥当性を確保するために母性看護学教員4名より意見を得た。

1) 演習プログラムのねらい

本プログラムは、従来の技術演習に特化した内容とは異なり、技術を習得しながら、家族を含めた支援の方法を考える演習内容とした(表1)。家族を捉えることが困難である学生の背景を鑑み、段階的に思考過程を踏めるような配慮をした。

①妊娠期演習は妊婦ジャケットにより日常生活行動制限を体験し、まず「家族に着目すること」「家族役割の具体的内容」が考えられる事を意図した。レポート課題は、「家族には妊婦をサポートするために何が出来るか具体的に記述する」を提示した。

②分娩期演習は家族員の分娩に対する不安や期待など「家族のニーズを考え」、「個々に対する看護師の働きかけ」を考えることを意図した。出産体験は、親としての行動に影響を与えるため、理想と現実が乖離していないかアセスメントすることが必要である。夫婦や家族が満足できる出産体験へと導き、ニーズを充足させることは、夫婦関係や家族関係を確立し、発達危機を回避しながら、発達を促していくことになる。よって、i. 妊婦、夫、祖父母が期待していることは何かを考え、満足した出産にするためには看護師はどのような働きかけができるか、ii. こどもが出産に立ち会うことを夫婦が望んでいるが看護師はどのような働きかけができるかという設問を行い、「家族の発

達を促す看護」について具体的に考えられる事を意図とした。レポート課題は、「家族の発達を促す看護について考えたことを記述する」を提示した。

③産褥期演習は、臨地実習で経験することが多い沐浴場面を選択し、「家族の不安を考え」て、i. 妊婦、夫の不安に対して看護師はどのような働きかけができるか、ii. 祖父母にはどのような役割があるのか、iii. こどもの反応に家族が心配しているが看護師はどのような働きかけができるかという「個々に対する看護師の働きかけ」を具体的にした後、「家族関係再構築への看護」について考えられる事を意図とした。レポート課題は、「家族関係再構築への看護について考えたことを記述する」を提示した。

2) 家族関係と役割行動の明確化

家族支援を考えるうえで妊娠・分娩・産褥期の家族関係と役割行動の視点のポイントをウェルネス看護診断にもとづく母性看護過程(石田ら, 2009)を元に明確にした。妊娠期間は、父親としての自己を受容し役割行動を取得していくことや、上の子や家族の役割を調整することである。分娩期は、分娩に対する対処行動をとることや、児を迎える家族の役割関係を考えること、夫の立ち会いなど産婦と一緒に分娩に臨むことである。産褥期は、新しい家族(児)の受け入れ、サポート体制を整えることである。

3) 家族の心理・生活状況をイメージするための工夫

学生が妊娠・分娩・産褥期の家族の生活がイメージできるように、なじみのあるキャラクターにストーリー性を持たせた家族のイメージ化を図った媒体の工夫、演習オリエンテーションの充実、事前に父子手帳の活用を促すなどを検討した。家族構成と家族成員の生活スタイルは妊娠期間演習時に提示した(図1)。分娩期演習時には、夫婦が家族3人で分娩に臨みたいと思っていることや、産痛緩和法を夫に望んでいるがうまく伝えられない産婦の気持ち、産痛緩和法が出来ず看護師に聞けずにいる夫の姿について提示した。産褥期演習時には、2人の子どもの世話ができるのか心配している母親の気持ちや、夜勤があり家を留守にすることがあるうえ、育児方法がわからない夫の気持ちを提示した。また、赤ちゃん返りする第1子の姿に心配する家族の姿を提示した。尚、図1には、妊娠期間演習のみ例示している。

2. 研究対象者

本研究対象者は、A看護短期大学2年生83名に研究協力依頼をし、同意の得られた80名である。

3. 用語の定義

家族とは、「子どもを産み育てる役割を担う家族員」と定義する。

表1 家族を含めた支援の内容を考える演習プログラムの内容

演習	妊娠期の演習	分娩期の演習	産褥期の演習
意図	「家族に着目すること」「家族役割の具体的内容」が考えられる事	家族成員の分娩に対する不安や期待など「家族成員のニーズを考え」「個々に対する看護師の働きかけ」を考えた後「家族の発達を促す看護」について考えられる事	「家族成員の不安を考え」「個々に対する看護師の働きかけ」を考えた後「家族関係再構築への看護」について考えられる事
目的	妊婦体験をとおして、家族の役割について考えることができる	妊婦体験をとおして、家族の役割について考えることができる	沐浴をとおして、家族の役割について考えることができる
目標	1. 妊婦の身体的・心理的側面への気づきが得られる 2. 妊娠期の家族役割について考えることができる 3. 家族役割獲得状況を把握するための具体的な質問内容を考えることができる 4. 学生間のディスカッションをとおしてコミュニケーション力を養う	1. 産婦の意向を確認しながら、呼吸法のリード・圧迫法が行える 2. 分娩期の家族役割について考えることができる 3. 家族の発達を促す看護について考えることができる 4. 学生間のディスカッションをとおしてコミュニケーション力を養う	1. 沐浴実施時の家族の具体的な介入方法を考えることができる。 2. 産褥期の家族役割について考えることができる 3. 家族関係再構築への看護について考えることができる 4. 学生間のディスカッションをとおしてコミュニケーション力を養う
方法	1. 事例の説明を受ける 演習前に家族をイメージする。26歳、30週の勤労経産婦と夫、保育園児の3人で暮らす核家族を提示する。 2. 体験する 妊婦ジャケットを装着しさまざまな動作を体験する。3人グループになり、妊婦役・夫役・家族役を体験する。 3. ディスカッション 妊婦は何を必要としているのか、家族は何ができるのかなど家族の役割について考えグループでディスカッションを行う。 4. レポートの提出	1. 事例の説明を受ける 演習前に家族をイメージする。産婦、夫、祖父母、上のこどもの持つ期待や不安を設定し提示する。 2. 体験する 呼吸法・補助動作を3人グループになり、産婦役・夫役・家族役を体験する。 3. ディスカッション 産婦・夫・祖父母が期待していること、満足した出産にするための看護師の働きかけについてディスカッションをする。 4. レポートの提出	1. 事例の説明を受ける 演習前に家族をイメージする。褥婦の退院後の不安や第1子の赤ちゃん返りに対する家族の心配を設定し提示する。 2. 体験する 沐浴演習を3人グループになり、褥婦役・夫役・家族役を体験する。 3. ディスカッション 褥婦・夫・祖父母の持つ不安に対して看護師はどのような働きかけができるのかディスカッションする。 4. レポートの提出

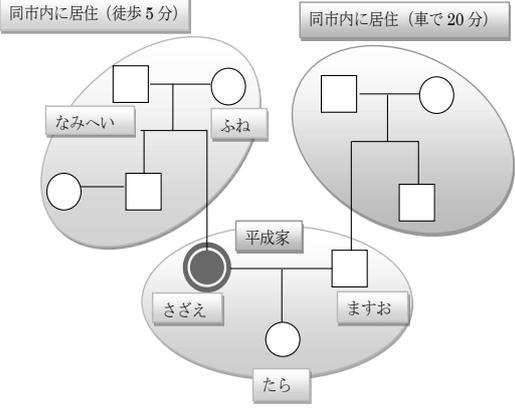
平成家の妊娠期の家族構成	平成家の生活
	<p>さざえさんは26歳。現在30週の経産婦。夫のますおさん30歳と子どものたらちゃん3歳と3人暮らし。</p> <p>2階建てのアパートの2階に住んでいる。</p> <p>さざえさんは建設会社の事務をしている。</p> <p>ますおさんは会社員で夜勤が2回/週ある。たらちゃんは保育園に行っている。</p> <p>さざえさんの両親は歩いて5分の市内に住んでいる。ますおさんの両親は車で20分の市内に住んでいる。</p>

図1 妊娠期の家族構成・生活スタイルをイメージする平成家の紹介

4. データ収集と分析方法

1) データ及び収集方法

①妊娠期演習は家族の役割、②分娩期演習は家族の発達を促す看護、③産褥期演習は家族関係再構築への看護について、演習後の提出レポートに学びを記述してもらい、その記載内容をデータとする。

2) データ収集 期間

データ収集期間は、平成23年6月～平成24年3月であった。

3) 分析方法

質的帰納的分析を用いた。学生の学びを明らかにするために、1) 妊娠期演習においては、家族の役割、2) 分娩期演習においては、家族の発達を促す看護、3) 産褥期演習においては、家族関係再構築への看護と合致する記述内容をデータの対象とした。そのデータを意味内容を損なわないように抽象度を上げて簡潔に表現しコード化した。それらのコードを同質性・異質性に基つき分類・集約しサブカテゴリ・カテゴリとして意味内容を示す言葉で命名した。分析の過程においてA看護短期大学の母性看護学教員間で討議し分析の信頼性・妥当性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

学生が研究について意図的に協力するような記述を避けるため、演習後に、研究の目的・方法、予測される利益や不利益、自由参加の保障、匿名性・個人情報の保護、成績には関係しない事について文章と口頭で説明をした。同意書の回収は筆頭著者ではない他の教員に依頼した。成績に関係しない事を保障するために、記録物の使用は成

績提出後に行った。本研究は、平成23年5月に岐阜県立看護大学大学院看護学研究科論文倫理審査部会の承認を得た。(通知番号23-A010-2)

IV. 結果

課題レポートの記載内容をカテゴリ化した。導き出された各カテゴリとそれぞれを構成するサブカテゴリを示す。文中では、抽出されたカテゴリを []、サブカテゴリを< >、コードを《 》で示す。

1. 妊娠期演習における学生の学び

レポート課題「家族には妊婦をサポートするために何が出来るか具体的に記述する」からは、家族の役割として夫の役割と祖父母の役割が抽出された。

学生の学びは、父子手帳に明記されている「身体を労り、気づかいを心がける」「家事は夫婦で協力する」「上の子の面倒をみる」などの内容が含まれていた。また、演習時には、キャラクターになりきって、夫婦や子ども、祖父母という家族役割を演じていた。

夫の役割は、5カテゴリ・7サブカテゴリが抽出された(表2)。

[日常生活動作のサポート] は妊婦には《足元が良く見えないので段差などの危険を知らせる》という、日常的な生活動作への支援についてであった。

[妻に寄り添いねざらう] は2つのサブカテゴリから構成された。<妻への気遣いと見守り>は《歩く時は、気にかけてながら一緒にペースで歩く》、《妻の大変さを理解し助ける》などであった。<声かけと心のサポート>は《声をかけるな

と精神的なサポートをする》などであった。夫は妊婦を気遣い見守り、声をかけ、話を聞くなど精神的なサポートをするという内容であった。

〔家族役割の調整〕は2つのサブカテゴリから構成された。〈家事の役割分担〉は《充分休養がとれるように掃除、洗濯など家事の分担》、《家事を妻一人に任せるのではなく夫がサポートする》などであった。〈上の子の世話〉は《積極的に上の子の面倒をみる》などであった。家族が家事や子育ての役割を担い、上の子の世話をするという内容であった。

〔父親像の自認と獲得〕は《妻と両親学級へ行き妊娠・出産の知識を得る》などであった。父親が、妊娠・出産の知識を得て胎児に関心を持つという内容であった。

〔家族関係の調整〕は《夫が夜勤の際に家族と一緒にいてもらうように調整する》などであった。夫が祖父母などのサポート者との関係を整えるという内容であった。

祖父母の役割は、4カテゴリ・6サブカテゴリが抽出された(表3)。

〔家族役割の支援〕は3つのサブカテゴリから構成された。〈家事の役割分担〉は《食事の支度の手伝いなどの役割を分担することで負担を減らす》などであった。〈上の子の世話〉は《遊んだり、世話をするなど上の子の面倒をみる》などであった。〈夫役割の代行〉は《父親が傍にいないときに代わりに妊婦の手助けをする》などであった。家事の役割分担や上の子の世話のような実際的な関わりに加え、傍にいて夫役割の代行をするという内容であった。

〔経験を活かしたアドバイス〕は《自分たちの子育ての経験からアドバイスする》、《祖母は出産の経験談を話すなどして知識を与える》などであった。子育て経験を活かして知

識を与えるという内容であった。

〔夫婦への気遣い〕は《妊婦の体調を常に気にかけて温かい目で見守る》などであった。妊婦を気遣うことや、妊婦の過ごす環境を整えることなどの内容であった。

〔育児教室への参加〕は《今の育児教室に参加して夫婦を助ける》などであった。現代の子育てと昔の子育てという時代の較差に着目し、祖父母も育児教室に参加することが役割であるという内容であった。

2. 分娩期演習における学生の学び

レポート課題「家族の発達を促す看護について考えたことを記述する」を提示した。

学生の学びは、父子手帳に明記されている「呼吸法のリード」「リラックスできるように話しかける」などの内容が含まれていた。

分娩期演習における家族の発達を促す看護に関する学生の学びは、〔家族の結合の援助〕〔家族役割の獲得の援助〕〔家族による分娩サポート方法の指導〕〔家族の心身のサポート〕の4つのカテゴリに分けられた(表4)。

〔家族の結合の援助〕は2つのサブカテゴリから構成された。《家族の考えや思いを聞き、それぞれの希望に添えるようにする》ことから〈家族の希望を叶え満足感をもたらす援助〉とした。また《家族が傍にいて応援し、一緒に分娩に臨めるように配慮する》《家族全員で1つになり、お互いの絆を強くし出産できるようにする》ことから〈家族の参加を促し一体感をもたらす援助〉とした。家族のそれぞれの希望を叶え、家族の参加を促し一体感をもたらす内容であった。

〔家族役割の獲得の援助〕は《どんな家族関係を築いていきたいのか話し合う機会を作る》ことから〈家族の役割変

表2 夫の役割

N = 80 (): コード数

カテゴリ	サブカテゴリ	コードの例
日常生活動作のサポート (60)	日常生活動作のサポート	・ 重い荷物を持つ、高い所の荷物を取るなど手を貸す ・ 足元が良く見えない為段差など危険を知らせる
妻に寄り添いねぎらう (33)	妻への気遣いと見守り	・ 歩く時は、気にかけてながら一緒に歩く ・ 妻の大変さを理解し助ける
	声かけと心のサポート	・ 声をかけるなど精神的なサポートをする ・ 妻の話を聞くなどの悩み相談
家族役割の調整 (31)	家事の役割分担	・ 充分休養がとれるように掃除、洗濯など家事の分担 ・ 家事を妻一人に任せるのではなく夫がサポートする
	上の子の世話	・ 積極的に上の子の面倒をみる、世話をする
父親像の自認と獲得 (2)	父親像の自認と獲得	・ 毎日赤ちゃんに声をかける ・ 妻と両親学級へ行き妊娠・出産の知識を得る
家族関係の調整 (1)	家族関係の調整	・ 夜勤の際に家族と一緒にいてもらうように調整する

表3 祖父母の役割

N = 80 (): コード数

カテゴリ	サブカテゴリ	コードの例
家族役割の支援 (51)	家事の役割分担	・ 食事の支度の手伝いなど役割分担することで負担を減らす ・ 近くに住んでいる為買い物などに一緒に出かけ荷物を持つ
	上の子の世話	・ 遊んだり、世話をするなど上の子の面倒をみる ・ 上の子を両親の代わりにかまったり気にかける
	夫役割の代行	・ 父親が傍にいないときに代わりに妊婦の手助けをする ・ 夫が留守の時は様子を見に来たり、家を訪問し一緒にいる
経験を活かしたアドバイス (26)	経験を活かしたアドバイス	・ 自分たちの子育ての経験からアドバイスする ・ 祖母は出産の経験談を話すなどして知識を与える
夫婦への気遣い (10)	夫婦への気遣い	・ 妊婦の体調を常に気かけ温かい目で見守る ・ 妊婦がリラックスできる環境を整える
育児教室への参加 (2)	育児教室への参加	・ 今の育児教室に参加して夫婦を助ける

表4 家族の発達を促す看護

N = 80 (): コード数

カテゴリ	サブカテゴリ	コードの例
家族の結合の援助 (31)	家族の希望を叶え満足感をもたらす援助	・ 家族の考えや思いを聞き、それぞれの希望に添えるようにする ・ パースプランに沿った満足感が得られる分娩にする
	家族の参加を促し一体感をもたらす援助	・ 家族が傍にいて応援し、一緒に分娩に臨めるように配慮する ・ 家族全員で1つになり、お互いの絆を強くし出産できるようにする
家族役割の獲得の援助 (19)	家族の役割変化の認識を促す援助	・ 誰が何の役割をしていくのか、新しい家族役割を話す機会を作る ・ どんな家族関係を築いていきたいのか話し合う機会を作る
	上の子に関心を向け関わりあえる援助	・ 上の子は母親と離れるため、上の子に対して説明出来るようにする ・ 児を受け入れ愛着が持てるようにきょうだいが増える事を説明する
家族による分娩サポート方法の指導 (15)	産痛緩和の具体的な指導	・ 呼吸法のリード・産痛緩和を家族皆ができるように支援する
	サポート実施への後押し	・ 焦りがでて何をしたいのか困惑する為助言する
家族の心身のサポート (14)	家族の安心をもたらす援助	・ 家族にも安心を得る声かけなど、家族への視点をおいてケアする ・ 児が誕生するときはそわそわするので声かけや分娩経過説明をする
	家族の休息をもたらす援助	・ 付き添いで疲労するため適度な休息、気分転換がとれるようにする

化の認識を促す援助>とした。また、「児を受け入れ愛着が持てるようにきょうだいが増える事を説明する」ことから<上の子に関心を向け関わりあえる援助>とした。家族の役割変化の認識を促し、上の子に関心を向け関わる内容であった。

[家族による分娩サポート方法の指導]は《呼吸法のリード・産痛緩和を家族皆ができるように支援する》ことから<産痛緩和の具体的な指導>とした。《焦りがでて何をしたいのか困惑する為助言する》ことから<サポート実施への後押し>とした。分娩サポート方法の具体的な指導と家族への後押しという内容であった。

[家族の心身のサポート]は《家族にも安心を得る声かけなど、家族への視点をおいてケアする》、《児が誕生する時はそわそわするので声かけや分娩経過の説明をする》ことから<家族の安心をもたらす援助>とした。また、《付き添いで疲労するため適度な休息、気分転換がとれるようにする》ことから<家族の休息をもたらす援助>とした。家族の精神的安心と身体的休息という内容であった。

3. 産褥期演習における学生の学び

レポート課題「家族関係再構築への看護について考えたことを記述する」を提示した。

学生の学びは、父子手帳に明記されている「話を十分に聞く」「休養がとれるように調整する」などの内容が含まれていた。

産褥期における看護師の働きかけの記載には、家族は心配の内容が移り変わる、妊娠期から指導の必要があるという記述が多くあった。育児・家事など変わることが多くあり、余裕がなくなる、慣れるまで大変である、身体的・精神的なストレスがあり負担などの記述があった。

産褥期演習における家族関係再構築への看護に関する学生の学びは、[新しい家族を受け入れるための援助][家族の協力体制を整える援助][生活リズムや役割の変化の適応を促す援助][生じた家族間の問題の調整][夫婦の意見を尊重した家族計画の支援][役割調整のために利用できる社会資源の活用を促す援助]の6つのカテゴリに分けられた(表5)。

〔新しい家族を受け入れるための援助〕は《上の子に兄になったという自覚が持てるように関わる》、《家族全員が兄を受け入れる環境づくりをする》など、新しい家族の受け入れについての内容であった。

〔家族の協力体制を整える援助〕は《祖父母を含め皆が協力体制を話合える機会を作る》など家族が協力し合えるような体制を整えるという内容であった。

〔生活リズムや役割の変化の適応を促す援助〕は《家族が生活リズムの変化に慣れることができるようにする》、《変化した役割に適応できるようにする》など、家族に生活の変化への適応を促す内容であった。

〔生じた家族間の問題の調整〕は《育児は家族で行うものなので、家族で起こっている問題を明らかにし解決していく》など、育児を行う中で生じる問題を、家族間で調整していくという内容であった。

〔夫婦の意見を尊重した家族計画の支援〕は《夫婦が互いに理解し考えや意見を尊重してパートナーへ性交開始時期、避妊方法を話す》など、夫婦のお互いの意見を尊重し合いながら家族計画を進めていくという内容であった。

〔役割調整のために利用できる社会資源の活用を促す援助〕は《利用できる資源や方法について共に考え助言を行う》など、社会資源の活用を促し、役割調整を進めていくという内容であった。

V. 考察

1. 妊娠期の家族をイメージしながら、家族の役割を具体的に考える演習方法の検討

学生が夫の役割を見出すことができた背景には、妊婦ジャケットを着用し身体的な変化を実感することで、「足元がよく見えず不安」などの妊婦の心理的变化が実感できたため

はないかと思われる。妊娠期の身体・心理的变化を理解したことで、〔日常生活動作のサポート〕や〔妻に寄り添いねぎらう〕ことを夫の役割として見出すことができ、本研究の目的である妊婦とその家族について具体的イメージを形成する演習方法であったと考える。

3人1組で演習を行い、第3者としての視点で妊娠期の家族役割を考えたことにより、〈夫役割の代行〉という祖父母の立ち位置としての〔家族役割の調整〕も見出すことができた。妊娠期は、ボディイメージの変化や不安・ストレスなど、妊娠期特有の母親の心理状態（マーシャルら、1979；大平ら、2012）を捉えて、妊婦の全体像を描きながら家族役割について考える必要があるため、妊婦体験で家族の役割を考えることは効果的であったと考える。

授業展開と演習が連動することを意図としたこのプログラムにより、日常生活行動制限に伴う困難や不安をもつ対象の状況を解決するための直接的なケアだけではなく、〔経験を活かしたアドバイス〕や〔育児教室への参加〕という祖父母を介した形での情報提供や、「気かけながら一緒にペースで歩く」など、〈妻への気遣いと見守り〉というケアリングを中心とした見守るケアなど多様なケアの方法に気づくことができたと考える。さらに、演習事前学習で父子手帳の活用を促したことも具体的な家族役割についての言語化につながったと考える。

2. 分娩期の家族の期待や不安をイメージしながら家族の発達を促す看護について考える演習方法の検討

分娩期は、産婦や家族にとって安全で快適な環境に調整し、満足感のある出産体験となる関わりが必要である。この演習では、家族のニーズを提示し、皆の意見を汲み取りながら調整をし、家族が発達していくための看護について考えられることを目的とした。家族をイメージできる事例紹介

表5 家族関係再構築への看護

N = 80 (): コード数

カテゴリ	コードの例
新しい家族を受け入れるための援助 (30)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 上の子に兄になったという自覚を持たせるように関わる ・ 家族全員が兄を受け入れる環境づくりをする
家族の協力体制を整える援助 (27)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 両親など周りの人達に協力してもらえるように働きかける ・ 祖父母を含め皆が集まって協力体制を話合える機会を作る
生活リズムや役割の変化の適応を促す援助 (22)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家族が生活リズムの変化に慣れることができるようにする ・ 変化した役割に適応できるようにする
生じた家族間の問題の調整 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 育児は家族で行うものなので、家族で起こっている問題を明らかにし解決していく
夫婦の意見を尊重した家族計画の支援 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 夫婦が互いに理解し考えや意見を尊重してパートナーへ性交開始時期、避妊方法を話す
役割調整のために利用できる社会資源の活用を促す援助 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 利用できる資源や方法について共に考え助言を行う

で、3人で分娩に臨みたいという家族のニーズや、痛いところをさすってほしいという産婦のニーズ、産婦の助けになりたいという夫のニーズ、孫の誕生に関わりたいという祖父母のニーズなど、家族がそれぞれにもつニーズを提示したことで、「家族の考えや思いを聞き、それぞれの希望に添えるようにする」など「家族関係の調整」を見いだすことができた。分娩期は児の誕生によって新たな役割に適応していく時期である。夫は父親に、妻は母親に、上の子は兄や姉に、父母は祖父母になっていく過程において、家族の発達危機を回避する必要がある、特に夫婦役割の確立や、産婦と家族が共に満足できるように援助することが家族の発達を促す看護であると考える。

3. 産褥期の現実に即した、家族関係再構築への看護について考える演習方法の検討

産褥期は、児の出生により今までの生活や家族関係を再編成していく必要性が生じるため、夫婦が生活調整できる関わりをしていく(川野, 2007)ことや、夫が育児に参加すること(西海ら, 2012)の重要性が言われている。この演習では、退院後の家族の役割分担の調整に着目し、家族関係再構築への看護について考えることを目的とした。学生は沐浴体験により、漠然としていた2人の育児と家事を行う母親の身体的負担と育児疲労について、より現実的に捉えることができたと考えた。このことにより、児の出生により家族の生活リズムや役割変化が生じることが理解でき、[生活リズムや役割の変化の適応を促す援助]の必要性を導き出すことができたと考えた。また、夜勤があり不在がちである夫を想定することで、褥婦に「両親など周りの人達に協力してもらえように働きかける」など、周りからの協力を得る必要性に対する気づきを得られたと考えた。さらに、育児休暇の取得や仕事量の調整など夫が育児参加できるような環境を作る必要性や、不可能な場合には祖父母に育児参加を働きかける必要性について考えを導くことができた。現代の核家族化や変則的な仕事体制等を取り入れた家族をイメージする事で、より現実に即した具体的な介入方法が考えられた。

4. 「家族支援を考える」のイメージ化の検討

演習方法は、家族をイメージし家族の役割を担う方法とした。なじみのあるキャラクターを用いてイメージしやすくしたことによりスムーズに家族役割を演じる事ができた。これは学生に興味関心をもたせた効果であり、実習前の講義・演

習で学生に興味を持たせることの必要性(野田ら, 2009)の先行研究と一致する。イメージしやすいキャラクターを用いて、家族の期待や不安を具体的に示すことで家族成員を含めた支援のあり方を考えるのに効果的であったと示唆される。事例は妊娠期から産褥期まで継続しており、3人家族「平成家」に児が誕生する過程で家族各々が期待や不安をかかえているストーリーとした。これにより学生は、妊娠・分娩・産褥の演習をそれぞれ独立したものと捉えるのではなく、連続性のあるものとして捉える事ができるのではないかと考える。継続した支援の必要性が言われている(高木ら, 2012)が、各期の演習に連続性を持たせることで、周産期のどの時期に焦点を当てたとしても焦点化した時期の前後の時期についてもイメージできる事につながり、支援の継続性について学べたと考える。

近年は、地域における子育て機能は脆弱となり、虐待など社会的問題は深刻になっている。そのため、男性や家族、地域社会をも対象に含めて支援をしていく必要がある。母性看護学を学ぶ学生が、子どもと親との関わりだけでなく、家族の関係性を捉えて家族支援について考えることができる教育方法は、意義のあることであると考えた。

VI. 研究の限界と課題

本研究では対象者が1つの教育機関に所属する看護学生のみであったことから、結果の一般化には限界がある。今後は対象者を広げるとともに、本研究における演習方法で学んだ学生の、臨地実習における家族を捉えた支援に対する理解を明らかにすることが今後の課題である。

VII. 結論

1. 妊娠期の家族をイメージしながら妊婦ジャケット体験を行う事で、夫・祖父母の視点から家族の役割について具体的な内容を考えることができた。
2. 分娩期の家族の期待や不安をイメージしながら呼吸法・補助動作の演習を行う事で、家族の意見を汲み取りながら、家族の発達を促していく看護について考えることができた。
3. 産褥期では、核家族であり夫の変則的な仕事体制を取り入れた家族をイメージする事で、より現実に即した家族関係再構築への看護について考えることができた。
4. なじみのあるキャラクターにストーリー性を持たせた家族

のイメージ化を図った演習は、学生に興味関心を持たせ、家族役割や家族を含めた支援を考えるために効果があった。

謝辞

本研究にご協力頂きました先生方ならびに学生の皆様へ心よりお礼を申し上げます。尚、本論文は岐阜県立看護大学大学院看護学研究科に提出した修士論文の一部を改変したものであり、第14・15回日本母性看護学会学術集会で発表したものである。

文献

石田登喜子, 太田操, 木村英子ほか. (2009). ウェルネス看護診断にもとづく母性看護過程. (第2版) (p.30). 医歯薬出版.

石井美里, 横山寛子, 豊田淑恵ほか. (2001). 産婦の看護における学生の取り組みと学び—母性看護学実習を通して—. 東海大学健康科学部紀要, (6), 35-40.

片山恵理, 内藤直子. (2011). 乳幼児をもつ母親・父親の家族機能と子育て支援. 女性心身医学, 15(3), 294-304.

川野雅資, 茅島江子. (2007). 看護学実践 母性看護学. (p.158). 日本放射線技師会出版会.

厚生労働省, 看護問題研究会. (2004). 厚生労働省「新たな看護のあり方に関する検討会」報告書. (p.183). 日本看護協会出版会.

マーシャル H. クラウス, ジョン H. ケネル. (1979/1981). 竹内徹訳 母と子のきずな 母子関係の原点を探る. (pp.330-338). 医学書院.

松木光子. (2010). 看護学臨地実習ハンドブック 基本的考え方とすすめ方. 宮地緑編. (改訂4版) (p.136). 金芳堂.

森恵美. (2009). 系統看護学講座 専門分野Ⅱ 母性看護学2. (第11版) (p.1). 医学書院.

西海ひとみ, 奥村ゆかり, 渡邊香織. (2012). 産後1か月における母親のストレス反応の生理的及び心理的特徴. 母性衛生, 53(2), 277-286.

野田貴代, 都竹友希子, 出口睦夫. (2009). 看護学生の母性看護学実習に対する意識調査(第2報) 実習後の気持ちと進路希望との関係. 愛知きわみ看護短期大学紀要, 5, 57-64.

小川佳代, 植村裕子, 榮玲子ほか. (2005). 臨地実習を通じた「地域で生活する妊産褥婦および乳幼児とその家族への援助」に関する学生の気づき—小児看護学領域と母性看護学領域の視点

からの分析—. 香川県立保健医療大学紀要, 2, 103-109.

大平光子, 井上尚美, 大月恵理子ほか. (2012). 母性看護学Ⅱ マタニティサイクル 母と子そして家族へのよりよい看護実践. (p.17). 南江堂.

太田操, 石田登喜子, 木村英子ほか. (2006). ウェルネス志向を取り入れた母性看護学の展開. 福島県立医科大学看護学部紀要, (8), 19-25.

重西桂子, 岡崎愉加. (2006). 分娩立ち会い実習における学生の体験と指導のあり方. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 13(1), 47-56.

高木静代, 小林康江, 小室真祐子ほか. (2012). 妊婦の視点からみた助産外来を受診することの意味. 母性衛生, 53(2), 242-249.

(受稿日 平成28年8月29日)

(採用日 平成29年1月30日)

Investigation of Maternity Nursing Seminars that Take Family Member Support into Consideration

Hiromi Kaneko¹⁾ and Ritsuko Hattori²⁾

1) Department of Nursing, Gifu University School of Medicine

2) Nursing of Children and Child Rearing Families, Gifu College of Nursing

Abstract

The aim of this study was to extend the scope of maternity nursing education seminars to include family members' viewpoints and to take family members' support methods into consideration by examining seminar methods in second-year students of A Nursing Junior College. The seminars were held with familiar characters in a story-like format to visualize the family. In pregnancy seminars, activities of daily living were conducted with students wearing a pregnancy simulation jacket and taking about the roles of the pregnant woman and her husband while imaging the presented characters. In delivery seminars, breathing techniques and supportive actions were performed while imaging family expectations and anxieties. In postpartum seminars, the students performed bathing training while imaging a nuclear family in which the husband has an irregular work schedule. Reports following these seminars were subjected to inductive qualitative analysis. Results indicated that pregnancy seminars facilitated student abilities pertaining to considering the roles of specific family members from the viewpoint of husbands and grandparents during pregnancy. Delivery seminars facilitated student abilities pertaining to comprehending the opinions of family members by imagining their expectations and anxieties during childbirth. Furthermore, the seminars facilitated student consideration of nursing practices to promote the development of healthy family relationships. Postpartum seminars facilitated student abilities pertaining to considering nursing practices that were more practically adapted to reorganizing family relationships by imagining nuclear families in which the husband had an irregular work schedule. These seminars, in which students considered the roles and support of family members, appeared to be effective because they facilitated student abilities pertaining to imagining family members as familiar "characters" in a story-like format.

Key words: family, maternal nursing, education